

# 教育制度論演習

## －英文資料との格闘と情報発信の二兎を追う試み－

藤田晃之

人間学群／教育学類

人間総合科学研究科教育学専攻准教授

(ふじた てるゆき／教育制度学)

### 「鬼」と呼ばれて10年目(?)

私が筑波大学に着任したのは1998年4月。今年度で10年目になります。いつの間にか中堅の部類ですが、いまだに学類・修士課程・博士課程のそれぞれの授業に臨む際の切り替えに手間取っています。特に、授業中に滑り込ませるエピソード(いわゆる「小ネタ」です)を、何度も繰り返して得意げに披露してしまっているのではないかとオドオドしてしまう時などは、悲しいやら情けないやら、複雑な心境になります。(その結果、たいていは小ネタを省略してしまい、情報過多の授業となって、自己嫌悪に終わるといふオチがついて回ります。)

このような小心者の私ですが、どういうわけか、学類生たちからは「鬼」と呼ばれているらしいのです。現時点での状況は判然としませんが、2年ほど前まではそうだったようです。何人かの学生同士での雑談中、私の名前を挙げて「鬼」と言った学生が、たまたま通りかかった私を見て、急に目を伏せるという状況に、これまで少なくとも3

回は遭遇しました。

「鬼」と呼ばれる理由は定かではありませんが、おそらく、人間学類の開設科目「教育制度論演習」が原因だろうと推測しています。私からあわてて視線をそらした学生たちは、例外なく当該演習の履修者でした。

### 英文資料をとことん読む

この10年、私の担当授業科目はいろいろと替わりました。その中で唯一、一貫して担当しているのが「教育制度論演習」です。この授業では、赴任した年からずっと、英文資料を読みこなすことを大きな課題にしてきました。今となっては、かたくなにこの方針に固執している部分もあります。

まず、現行のシラバスから、授業の概要紹介部分を引用します。



1990年代以降、日本で進められてきた教育改革は、総体として“脱詰め込み”“脱画一化”の指向性を強く有し、賛否両論をひきおこしつつ今日に至っている。一方アメ

リカ合衆国では、1980年代から一貫して学力の向上（＝詰め込み型教育への傾斜）と全米共通の学習到達度の設定（＝全国的画一化への傾斜）が、教育改革のスローガンの重要な構成要素となっている。日米両国のこの「差」はなぜ生じたのか。実際にアメリカでどのような教育改革が進展しているのか。本演習では、これらの問いをスタートとして、アメリカの教育制度の特質に迫ってみたい。

そのための手段として、まさに“今”アメリカの人たちが目にしている教育関係文書（論文、エッセイ、連邦政府文書、州政府文書等）をインターネット等から入手し、積極的に読み進めていこうと考えている。



毎年、導入教材として最初に扱うのは、アメリカで今日展開する教育改革の基本的方向性を決定づけたとも言える報告書*A Nation at Risk* (1983)です。実は、この報告書については、全文が翻訳され、市販の単行本に収録されています。学生には、当該図書も紹介し、「翻訳を参考にしてもいいけど、せめて担当箇所については、英文をちゃんと読んでから次の授業に出るようにしよう」と念を押しておきます。

無論、学生の中には、既存の翻訳を棒読みする者、文脈に関係なく辞書の冒頭に掲載される語義をつなげて、意味不明の日本

語のまま平然と発表する者などが必ず混じります。私は、そのたびに「なぜそう訳せるのか説明してくれる？」と粘るので、5月前半頃までの授業は、学生にとっても、私にとっても、居心地の悪い雰囲気です。

けれども、この居心地の悪さに耐え、この授業はなめてかかれない、という共通認識を形成できるか否かが、その後の授業の質を決定づけるように感じています。また、こうでもしないと、授業中に翻訳の初歩的誤りを訂正することに時間が奪われ、肝心の事実確認や意見交換ができないという悲劇も待ち受けているわけです。

ちなみに、現在の人間学類（教育学）の演習では、英文資料を軸に進めるものがほとんどありません。私が学生だった頃は、演習と言え、英文を読むというのが通例でした。旧態依然の化石も山の賑わいですので、しばらくはこれまでの方式を変えずにおこうと思っています。

## インターネットを使い倒す

こうして1学期中は、いわゆる基本的資料を読みつつ、アメリカの教育制度を理解する上での基盤となる知識の整理とその定着を主眼として授業を展開します。

一方、2学期・3学期は、学生による個人発表が主軸です。学生個々がテーマを定め、学年末の最終レポートに向けた情報収集を

行い、授業はその中間報告会に相当する役割を担うことになります。

そして、2学期以降の授業に先だって必ず行うのが、インターネットを活用した情報検索の方法をめぐる解説です。日米の各種ジャーナル掲載論文の検索、アメリカ国内の政策・法制・行政情報の検索をはじめとした基本スキルについて、1学期末に1回、その復習として2学期冒頭に1回、毎年必ず、解説のための時間を確保します。

この解説を省いてしまうと、学生たちは、ウィキペディアなどの二次情報を引き写したり、ロボット型サーチエンジンに、思いつきに任せてキーワードを打ち込み、その検索結果を無理矢理で接ぎ合わせてレポートをまとめようとしたりと、思わぬ行動に走ります。特に後者は、泳ぐ術を知らないまま玉石混淆の情報の大海に身を投じる愚行とも言える行為ですが、学生たちの多くは、その危険性さえ自覚していないようです。「今時の若い者なら、インターネットは使いこなせるもの」というのは、私たちの思いこみに過ぎないのかもしれない。

ただ、学生たちの飲み込みは素早く、解説を丁寧に行うようになってから、学生たちが目を覆いたくなるほど稚拙な発表をするケースは激減しました。

## 情報発信へ

このようにしてまとめた学生個々のレポートは、インターネットによる公開を原則としています。そのため、3学期に2回、「手づくりHTML講座」と称して、ウェブページ作成の基本について解説と演習を行います。文字情報を基本とするレポートですので、覚えるべきタグの種類はさほど多くはありません。

そして、2月末日を締め切りとして学生の「大作」が私の手元に集まります。私の最後の作業は、それをインターネット上に発信することです。

公開を前提としたレポート作成は、学生たちにとって確かに高いハードルのようです。けれども、手抜きせず真剣に取り組んだ分だけ自分の作品（研究の成果）に愛情を持つようになるのではないかと、そして、その愛情は他者の作品への愛情や敬意にも発展し得るのではないかと、虫のいい希望的解釈をしているところです。

お時間のある時にでも、学生たちの作品をご高覧いただければ幸いです。

<http://www.human.tsukuba.ac.jp/~tfujita/>